

「国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP)」第 12 回ワークショップ開催

2021 年 11 月 10 日、SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の第 12 回ワークショップがオンラインで開催され、参加大学 23 校から 48 名が出席しました。今回は、アジアの大学を代表して、インドネシアのスラバヤ工科大学 (Institute of Technology Sepuluh Nopember, ITS) から、3 人の講師、Dr. Maria Anityasari, Ph.D., Dr. Rulli Pratiwi Setiawan, Ph.D., Dr. Agnes Tuti Rumiati, M.Sc., をお招きして講演していただきました。ITS はインドネシア東部地域の拠点大学として科学技術分野をリードし、工学と科学の発展と国連の持続可能な開発目標 (SDGs) の達成を目指しています。Times Higher Education のインパクトランキングでは、前年の世界第 400 位から大幅にランクを上げ、今年 4 月の発表のランキングでは第 64 位にランクインしました。3 人の講師は、「持続可能な開発目標に向けた ITS の取り組みとその強化」というテーマで、次のように話しました。

ITS は、教育、研究開発、地域貢献というインドネシアの大学の果たすべき 3 つの責任 (ダルマ) をガイドラインとし、様々なイノベーションに力を入れています。2015 年の SDGs 採択以前から、低所得者層の学生や工学分野を専攻する女子学生に対する特別奨学金の提供、後発地域の状況改善を支援するための海外パートナーとのアクションプログラムの実施など、数多くのサステナビリティ関連の活動を行ってきました。2020 年には、学内に World Class University (WCU) 部門を設立し、SDGs 活動を強化改善するために、データ収集と分析に力を入れ、多岐にわたる活動計画を作成し実行しています。また、サステナビリティ報告書を作成し、活動の成果を学内および世界に向けて発信しています。

2020 年 1 月には、SDGs センターを設立し、インドネシア東部の村々で SDGs 活動を展開するために、国、州、地方政府と緊密に連携し、取り組みの企画、実行、実施評価を行っています。インドネシアにはおよそ 84,000 の村があり、国の居住地域の 91% を占めています。人口の 43% が村に住んでおり、貧困、教育の質の問題、上下水道設備の問題などが深刻です。村の重要性に焦点をあてた Village SDGs という活動もスタートし、政府、NGO、企業、地域のコミュニティなどとのパートナーシップを通して積極的な取り組みが行われています。また、インドネシアにおいては、村落途上開発地域移住省 (the Ministry of Village Development of Disadvantaged Areas and Transmigration) によって、貧困、教育の質、上下水道に関する問題を解決するため、従来の SDGs にもう一つ国家目標が追加されました。この目標は「村落の発展と文化の適応」(Dynamic village development and adaptive village culture) で、宗教、文化、言語、習慣など、多様性に富んだインドネシアの人々のため、村の伝統、知恵、制度を取り入れ、さらなる村落の開発、発展を目指すものです。

Times Higher Education のインパクトランキングでは、今年 4 月の発表で大幅にランク

を上げ、第 64 位にランクインしました。特にスコアが高かったのは、SDGs1（貧困をなくそう）、7（エネルギーをみんなにそしてクリーンに）、12（つくる責任つかう責任）および 17（パートナーシップで目標を達成しよう）でした。これらは ITS が、貧困撲滅に対する活動、クリーンエネルギーの提供、国内国外の様々な組織とのコラボレーションなどを積極的に行った結果だと考えています。SDGs センターが中心となって、SDGs のコンセプトをインドネシア全体に波及させ、SDGs ゴールの達成に貢献していきたいと考えています。

Anityasari 教授は、インドネシアの SDGs の目標実現に資する実践を促進するため、日本の大学にもコラボレーションに参加してほしいと次のように呼びかけました。例えば、Sister village program に参加することにより、インドネシアにおける SDGs 活動に関する政府パートナーとして、SDGs のコンセプト、政策、および実行可能なプログラムを開発し、地域社会との架け橋となるという経験をしていただけます。また、2020 年から、ゲスト・レクチャー・シリーズ (GLS) として、国連の持続可能な開発目標に関連したレクチャープログラムを開催しています。「SDGs 2021」をテーマに、週 2 回、学期ごとに 50 以上の講演会を、世界中から専門家や学術関係者を講師として招いて開催しており、海外からのオンラインで受講が可能です。Anityasari 教授は、SDGs 達成のためには、良いパートナーシップが不可欠で、緊密な関係を築くことで SDGs 実施をさらに加速できると強調し、日本の大学関係者にも ITS のプログラムに興味を持っていただき、パートナーや講師としてぜひ参加して欲しいと述べ、講演を終えました。

その後 UNU-IAS の福士謙介アカデミック・ディレクターをモデレーターとして、ITS の様々な取り組みに関して活発な議論が展開されました。Anityasari 教授はインドネシアでは SDGs がまだ広く認知されておらず資金的なサポートが十分得られていないという問題をあげ、人材と時間をかけて取り組む必要を感じており、今回のワークショップで課題を再確認でき大変有効であったと強調しました。

第 2 部の参加大学によるグループ討論では、海外大学との連携についてというテーマで、各大学の様々な取り組みが共有され、SDGs 推進の流れを活用して現地の大学と繋がっていくアプローチは非常に有効であるとの指摘がありました。また、海外大学とのオンライン授業の実施において、各大学が現在直面している課題が確認されました。さらに、海外大学と学生と教員の行き来ができる相互関係を築きたい、途上国で新たな課題に触れ、学生が感動できるような体験を提供したいという意見も交わされました。

総括として、村田俊一関西学院大学総合政策部教授 (SDG-UP アドバイザー) は、スラバヤ工科大学 (ITS) は政府の政策に SDGs 要素をブレンドし、教育、研究開発、コミュニティサービスに力を注いでおり、政府からのトップダウンと村のレベルからのボトムアップ

の仲介役を担っていることを強調しました。多岐にわたる取り組みが紹介されましたが、インドネシア東部地域の地方公共団体の役割と、その地域の拠点大学としての ITS の役割の住み分けに関して説明がなされなかった点を指摘しました。また取り組みの中で供給主導型の過度のアシスタンスで自立発展性が損なわれ、かえって依存度が増すことへの懸念を表明し、キャピタルアシスタンスと言われる普通の協力関係の中で自立発展性を高めてゆくための学術的な議論の必要性について述べました。村田教授は、本日の講演者である 3 人の教授はチェンジエージェントであると指摘し、構造改革を実行する中で SDGs の特別なユニットの立ち上げに成功したこともインパクトランキングを上げることに貢献したのではないかと述べました。そして、ITS が、リソースが不十分でもイノベーションに力を入れ SDGs ゴールの達成に向けて努力している点を評価し、日本の大学でも SDGs に関わる取り組みにおいてイノベーションという要素の重要性を再認識したいと強調しワークショップを締めくくりました。

参加大学 23 校（アルファベット順）

千葉商科大学、広島大学、北海道大学、国際基督教大学、国際大学、金沢大学、慶應義塾大学、関西学院大学、九州産業大学、九州大学、奈良教育大学、ノートルダム清心女子大学、お茶の水女子大学、沖縄科学技術大学院大学、大阪医科薬科大学、大阪公立大学、龍谷大学、創価大学、上智大学、東京都市大学、東京工業大学、北九州市立大学、東京大学